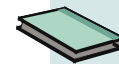


## この本と私



## 「絵のない絵本」

アンデルセン 著

山野辺 五十鈴 訳



集英社文庫

「さあ、絵にしたらん。私の話したことを。そうすれば、ちよつとした絵本ができる」。一人寂しく暮らす絵描きのもとに、夜ごと月が訪い、世界各国で見聞きした話を聞かせてくれます。『絵のない絵本』のタイトルどおり、本当に挿絵一つない本です。月が聞かせてくれる物語を絵にしていくのは、一人暮らしの絵描きと、一緒に月の話を聞く(読む)「読者」。月の話は、時間軸がばらばらで、何百年も前のヴェスビオ火山の噴火の話があったかと思うと、昨日見たドイツでの話だったり。月に見れば、一晩で世界の半分を見通す事が出来るのだから、時間なんて特に問題ではないのだろう。ただ、自分の見たまま、聞いたままの出来事を話して聞かせるだけ。そして、物語というよりも散文詩という感じで物語は進んで行きます。

今回、特に興味深く思ったのは、文体の方でした。文の並びが「主語+動詞+目的語または修飾語」の順で並んでいます。日本語の並び順では、まず見る事がない形。デンマーク語の文章をそのオーダー通りに頭から和訳しているような文章です。日本語の物語を読み慣れている目で見ると、少し違和感がありました。文節ごとに言葉が踊りだすようで、一体どこへ行くのか後を追いかけるのに精一杯。もし原文で読むことができれば、あるいは、英訳されたものなら、月はどうなふうに話してくれるのだろうか。異国の言葉で、月の話を読んでみたい。月が話してくれた事を思い出しながら、秋の夜を楽しむつもりです。

佑起子